

## 会話における非現場指示の「コ・ソ・ア」の選択要因：中国人日本語学習者を中心に

趙, 天寧  
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/1959211>

---

出版情報：地球社会統合科学研究. 9, pp.59-66, 2018-09-25. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 会話における非現場指示の「コ・ソ・ア」の選択要因

—中国人日本語学習者を中心に—

チョウ  
趙

テン  
天 寧

## 1. 研究背景・目的

日本語を第二言語として学習している中国語母語話者(以下「日本語学習者」か「学習者」と呼ぶ)が指示詞「コ・ソ・ア」を使い分ける際、中級以上の日本語学習者においても次のような誤用<sup>1)</sup>がよく見られる。

A:おとし、いっしょに箱根へ行ったでしょう。それは6月でしたよね。

(「あれ」が正用)

B:いいえ、8月ですよ。

上記のような誤用が起きる原因は、主に日本語の指示詞と中国語の指示詞に差異があるからだと考えられる。

まず、日中指示詞の系列が違うことが挙げられる。日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の三項対立で、遠い要素を指す場合「ソ・ア」の二系がある。中国語の指示詞は「这・那」の二項対立で、遠い要素をさす場合は「那」系しか使用できない。それから、両言語の指示詞を使用する際の参照項目も違う。中国語の指示詞が主に話し手の考え方によって選択されるのに対して、日本語の指示詞は聞き手の気持ちも配慮して選択される。

具体的に述べると、主に次の先行研究があげられる。

### 日本語の指示詞について

久野(1973)は、「コ・ソ・ア」の非現場指示用法について、基本的に話し手と聞き手の間に「知識」や「体験」が共有できるかどうかという視点から提示し、「共有知識説」を提出した。久野の研究によれば、「コ・ソ・ア」の非現場指示の用法は次のようにまとめることができる。

ア—話し手と聞き手がともによく知っている。

ソ—話し手がよく知らない・話し手がよく知っているが聞き手がよく知らないと想定する。

コ—話し手だけがよく知っている。

つまり、話し手と聞き手が提示した対象を「知っているか」という観点から「ソ」系と「ア」系の非現場指示の構造を提示している。

他に、金水他(1989)は、学習者が日本語の指示詞を習得するためには、「コ・ソ・ア」各系列の意味・用法

の違い、指示詞の運用上の変異、語形による指示対象の分類という3つの次元にわたる学習が必要であると指摘し、この3つの観点から日本語の指示詞の非現場指示法に関して詳しく解釈している。

### 中国語の指示詞について

呂叔湘(1980)の研究によると、中国語の指示詞は、話し手が時間的・空間的・心理的に自分に近いと感じている対象を「这」系で指し示し、遠いと感じている対象を「那」系で指し示すとされている。つまり、中国語の指示詞の使用は主に発話者との関わり(近い/遠い)によって選択される。この考え方は中国の各種の国語教材でも広く用いられている。

呂(1995)では、さらに「这」は「話し手にとって近いものを指示する」「話し手にとって近いものを代行する」場合に用い、「那」は「話し手にとって遠いものを指示する」「話し手にとって遠いものを代行する」場合に用いと述べている。

また、張(2004)は中国語の指示詞の「心理距離」について研究を行ない、心理学に関する知識を運用して中国語の指示詞「这・那」の選択要因を解釈、説明し、心理的な「遠・近」に影響する要素を①集中する目標と背景、②考え方、③感情・情緒、④想像と記憶、とまとめている。

このように、日中指示詞の違いによって、日本語学習者が日本語の指示詞を選択する際に、近指の指示詞なのか遠指の指示詞なのか、また遠い要素を指すときに「ソ」と「ア」のどちらを使うのか迷うことが少なくない。

したがって、日中指示詞の系列の差異が、日本語学習者が日本語の指示詞を学習、選択、運用することに影響しているのではないかと考えるようになった。

本研究は、日中指示詞の系列に差異がある背景を踏まえ、日本語学習者が非現場指示詞を学習する際に母語が目標言語に干渉しているのか、非現場指示詞をどのように学習したのか、どのような原則に従って非現場指示詞を選択、運用しているのかについて調査、検証することを目的とする。

## 2. 研究課題

以上を踏まえると、会話における日・中両言語の非現場指示詞の使用と中国人日本語学習者が日本語の非現場指示詞の運用について調査・研究する試みが必要だと思われる。本研究で解明したい問題を次の2つの研究課題に絞った。

課題1：中国人日本語学習者が日本語の非現場指示詞を選択する際、現場指示用法から類推して選択するだろうか。

課題2：中国人日本語学習者は、中国語指示詞の影響により発話者との関わり（時間的・心理的な遠/近）のみによって非現場指示詞を選択するだろうか。

## 3. 用語の定義

「コ・ソ・ア」各系列の指示詞の名称について、これまでの研究においては統一されていない。それぞれの用法の名称は、目の前にある実物を指示する用法（現場指示）と文章、話の中の事柄を指示する（非現場指示）用法によって分けられる。「現場指示」は「眼前指示」「外部照応」とも呼ばれ、「非現場指示」は「文脈指示」「内部照応」とも呼ばれる。また、非現場指示用法について、堀口（1978）は非現場指示に属する「観念指示」の用法を提出し、文脈指示と区別した。このように、非現場指示用法を下位分類の「文脈指示」と「観念指示」に分けることができる。

本研究は、主に日中指示詞の「現場」と「非現場」の指示用法を区別して調査・考察するため、現場の指示用法において「現場指示」の用語を用いる。非現場指示用法については、下位概念である「文脈指示」と「観念指示」を用いず、「非現場指示」という上位概念の用語を用いる。

## 4. 調査の概要

### (1) 調査の目的

今回の調査は、日本語の会話における非現場指示の「コ・ソ・ア」の使用状況を調べ、母語話者の使用傾向と日本語学習者が誤用しやすいところを見出すことを目的とした。

### (2) 調査対象と調査方法

調査は九州大学の日本人学生66人を日本語母語話者の調査対象とし、その中で有効な回答は63人分であった。また、九州外国语学院、別府大学、大分大学、九州大学に在籍している日本語能力試験N1に合格した上級レベルの留学生63人を日本語学習者の調査対象とし、回答が

全部有効な回答となった。

また、調査は三択一のテストの形で記入してもらった。

### (3) 調査項目

今回の調査では、久野（1973）の説を踏まえ、金水他（1989）の日本語指示詞の非現場指示用法に関する解釈をもとに、非現場指示における「コ・ソ・ア」の用法を「共有体験・知識」、「特定の体験」、「体験・知識提示」、「仮定文脈」、「文脈焦点」の5つに分類し、それぞれの項目について調査を行った。表1は調査項目を表している。

表1：非現場指示の「コ・ソ・ア」の調査項目

①	ア系	共有体験・知識
②	ソ系	体験・知識提示
③	ソ系	仮定文脈
④	コ系	文脈焦点（特定の主題）
⑤	ア系	特定の体験

本研究では、非現場指示における「コ・ソ・ア」の用法を次のように定義している。

ア—話し手と聞き手の共通体験や共有知識を指示する。

また、特定の体験や会話の流れ・状況から、指し示される物事が持ち出されたことがなくても聞き手にもすぐにわかる場合。

ソ—共通に体験していない出来事、相手が持ち出した自分がよく知らない物事やすでに現れた物事、聞き手の知らない物事を再び指示する。また、仮定文脈の中の対象を指示する。

コ—話し手にとって特別な関心や感情を持っている部分、または対象や話の流れから特に相手の注意を引きたい部分（文脈焦点・先行詞）を指示する。

## 5. 調査の結果

非現場指示「コ・ソ・ア」の使用において母語話者と学習者の間に差異があるかを確かめるために、有意水準5%でカイ二乗検定を用いて集計したデータを分析した。表2に示す検証した結果のように、非現場指示の「コ・ソ・ア」の使用に関して、文脈焦点（特定の主題）の「コ」が母語話者と学習者の間に5%水準で有意差は得られなかったが、他の質問ではいずれも有意差が見られた。

表2 母語話者と学習者の選択状況の $\chi^2$ 検定結果

		母語話者 (63人)	学習者 (63人)	
		調査項目	質問	$\chi^2$
①	共有体験・知識—ア		1	*
			2	*
			3	*

②	体験・知識提示—ソ	4	*
		5	*
		6	*
③	仮定文脈—ソ	7	*
		8	*
④	文脈焦点 (特定の主題)—コ	9	n.s.
		10	*
		11	*
⑤	特定の体験—ア	12	*

(1) 分析と考察—有意差なし

まず、母語話者と学習者の間で有意差が見られなかった「コ」系指示詞の選択状況を見てみる。(下線を引いているところはその質問の正解である。)

表3 「コ」系指示詞の使用

調査項目④	質問	選択率 %			
		対象	コ	ソ	ア
文脈焦点 (特定の主題) コ	9.A: 奥さんにダイヤモンドの指輪を買ってあげるんですか。 B: ええ。明日は私と妻の50回目の結婚記念日です。明日こそ、_____50年間ずっと私のそばにいてくれた妻に感謝を言うときです。	母	94	6	0
		学	86	13	1

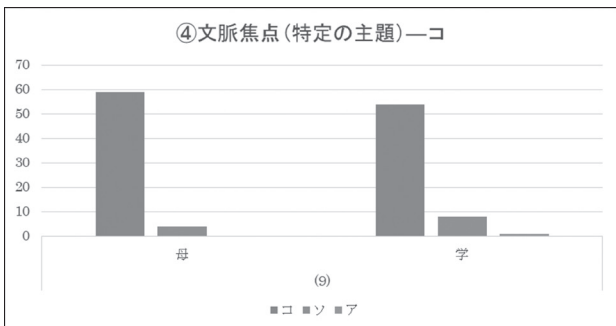


図1 「文脈焦点 (特定の主題)—「コ」の選択状況

質問(9)は「コ」系の指示詞を選ぶべき質問である。話し手は「妻との50回目の結婚記念」という話題について相手に詳しい説明を進めている。会話では話し手が特に取り上げたいもの、聞き手の注意を引きたいものを「コ」系の指示詞で指し示す他に、質問文のように1人が特定の主題について話を進めるときにもよく「コ」系の指示詞を用いる。表3に示すように、母語話者と学習者はともに正解の「コ」系の指示詞を多く選択している。

「コ」系の指示詞を選ぶべき質問では母語話者と学習者の間に5%水準で有意差が得られず、両方とも正解率が高い傾向が見られる。一方、他の「コ」を用いない或は用いにくい質問では、母語話者よりも学習者の「コ」

の使用率の方が高い傾向が見られる。この場合、母語の「这」系をよく用いることが影響していると考えられる。

(2) 分析と考察—有意差あり

次に、母語話者と学習者の間で「コ・ソ・ア」の選択に有意差が見られた質問を見てみる。有意差が見られた質問において、学習者の回答にはいくつか選択上の問題点が見られた。

①共有体験・知識—「ア」

表4 共有体験・知識—「ア」

調査項目①	質問	選択率 %			
		対象	コ	ソ	ア
共有体験・知識—ア	1.A: ところで、_____本、もう読みましたか。 B: ああ、一週間前にお借りした本ですね。半分くらい読んだところですが、なかなかおもしろいですね。	母	13	1	86
		学	22	18	60
	2.A: おとし、いっしょに箱根へ行ったでしょう。__は6月でしたよね。 B: いいえ、8月ですよ。	母	0	13	87
		学	11	29	60
	3.A: 『吾輩は猫である』を読みましたか。 B: _____は、おもしろい小説ですね。	母	3	27	70
		学	8	49	43

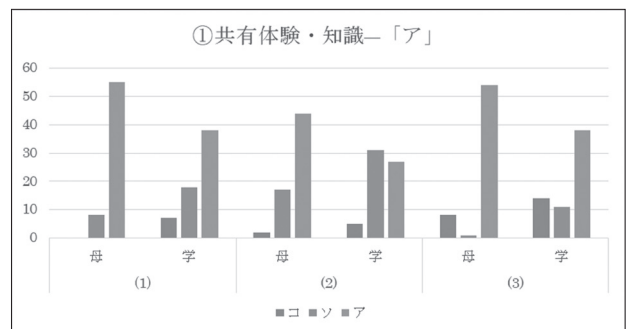


図2 「共有体験・知識—「ア」」の選択状況

質問（１）、（２）、（３）は「ア」系の指示詞を選ぶべき質問である。

質問（２）の「箱根」は話し手と聞き手が一緒に行っていたところであり、質問（３）の「『吾輩は猫である』」は話し手と聞き手がともに読んだことがある小説である。「共有体験」と「共有知識」を指し示す場合であるため、「ア」系の指示詞を用いることが普通である。質問（１）の「一週間前にお借りした本」という指示内容は、前もって会話に持ち出されていない物事である。この場合、普通は「ソ」系の指示詞を用いるが、この会話では話し手と聞き手はその本について以前話し合ったことがあり２人がそれをよく覚えているため、会話に一度も持ち出されたことがなくても会話の流れから聞き手がすぐにその本を思い出すことができる状況であり、「ア」系の指示詞を用いることができる。

表４に示された母語話者と学習者の選択状況を見ると、母語話者は「ア」系の指示詞を多く使用していることがわかる。しかし、質問（３）では、「『吾輩は猫である』」は共有知識であるため「ア」系の指示詞を用いるのが普通であるが、一度会話に持ち出されたため、「ソ」系の指示詞も用いられる。そのため、母語話者の質問（３）に対する「ソ」と「ア」の揺れは、質問（１）と（２）よりもやや大きい傾向が見られる。

一方、学習者を見ると、「ソ」と「コ」を使用した回答者が母語話者よりも多い傾向が見られる。また、質問（１）と（２）では「ア」系の指示詞を最も多く選択しているが、質問（３）では、「ソ」系の指示詞の使用が「ア」系よりもやや多かった。この項目からも、学習者が「ソ」と「ア」の使い分けを習得できていない可能性が考えられる。

②体験・知識提示－「ソ」

表５ 体験・知識提示－「ソ」

調査項目 ②	質 問	選択率 %			
		対象	コ	ソ	ア
体験・知識提示 ソ	4.A：昨日、夜道で転んでしまいました。 B：頭のけがは____ 時のものですね。	母	13	1	86
		学	22	18	60
	5. レストランのスタッフ：今日のおすすめ料理は、牛肉ステーキです。 客：なかなかおいしそうだ。ぜひ、____をください。	母	0	13	87
		学	11	29	60
	6.A：〇〇小学校はどう行けばよろしいでしょうか。 B：この角を曲がって100メートルほど行くと交番がありますから、____で聞いてください。	母	3	27	70
		学	8	49	43

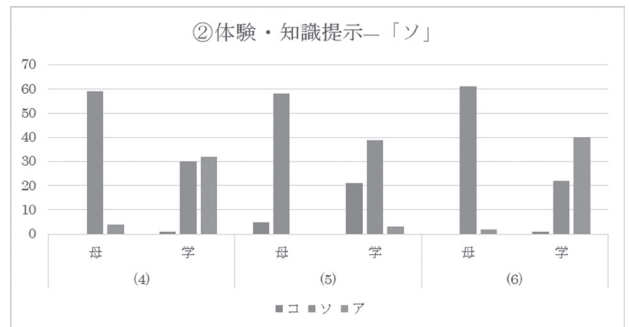


図３ 「体験・知識提示－ソ」の選択状況

この調査項目では「ソ」系の指示詞を選ぶべきである。質問（４）の「夜道で転んでしまった」という経験は共有していない出来事であり、「コ」系や「ア」系の指示詞を用いることができない。質問（５）の「おすすめ料理」と（６）の「100メートルほど行くと交番がある」という情報は聞き手にとって知らない物事であるため、母語話者は普通「コ」系や「ア」系の指示詞を用いない。

表５に示すように、母語話者は「ソ」系の指示詞を多く選択している傾向が見られる。それに対して、学習者は質問（４）と質問（６）で「ア」系の指示詞を最も多く使用しており、質問（５）では「コ」系の指示詞の使用が母語話者より多くなっている。質問（４）の学習者の選択状況を見れば、非現場指示の「ソ」と「ア」の使い分けを習得していないことが問題の原因であると考えられる。そして、学習者は「ソ」と「ア」を選択する際にどのような規則に従っているのかという点にも疑問を持っている。指示内容の「夜道で転んでしまいました」



が昨日のできごと・相手の経験であり、時間的にも心理的にも発話者との関わりが遠い。そのため、学習者は現場指示用法の影響で「ソ」系よりは「ア」系がより遠い対象を指すときに使うのだらうと類推して「ア」を多く選択したのか、という点に疑問を持っている。

また、質問(6)の「10メートルほど行くと交番がある」という会話文の内容を指し示す際、学習者は現場指示であると勘違いして「ア」系の指示詞を多く選択する可能性がある。つまり、現場指示用法が非現場指示用法に影響している可能性がある。

質問(5)では、学習者は「ソ」系の指示詞を多く選択しているが、母語話者より「コ」系の指示詞を多く選択している状況も見られる。その原因として、発話者とその料理を注文することに対して特別な関心や興味を持ち、強調して指し示しているのではないかと考えられる。

### ③ 仮定文脈の「ソ」

表6 仮定文脈の「ソ」

調査項目 ③	質 問	選択率 %			
		対象	コ	ソ	ア
仮定文脈 ソ	7.A: もし適当な候補者が見つかったら、____人の名前を知らせてほしい。 B: わかりました。	母	0	100	0
		学	8	65	27
	8.A: もし雨が降ったら、どうする? B: _____時は、しょうがないから濡れて帰るさ。	母	0	98	2
		学	3	65	32

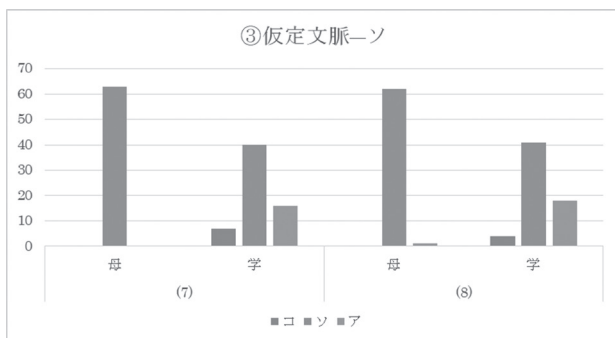


図4 「仮定文脈—ソ」の選択状況

質問(7)、(8)は仮定された内容についての会話文である。実際の出来事ではなく、仮定された未来の出来事や仮定文脈の中で持ち出された物事を指し示すときは、普通「ソ」系の指示詞を用いる。質問(7)の「適当な候補者が見つかる」と、質問(8)の「雨が降る」と

いう状況は、両方とも仮定された未来の出来事、仮定の文脈の中で持ち出された物事である。

表6を見ると、母語話者はほぼ全員「ソ」系の指示詞を選択している。それに対して、学習者の多くも「ソ」系の指示詞を選択しているものの、「ア」系の指示詞の使用が母語話者よりもかなり多く、「コ」系の指示詞も使用している結果が見られる。このような結果になった原因として、学習者が仮定文脈の「ソ」の用法を習得していないことが考えられる。

### ④ 特定の体験の「ア」

表7 特定の体験の「ア」

調査項目 ⑤	質 問	選択率 %			
		対象	コ	ソ	ア
特定の 体験 ア	10.A: 合格した知らせを見たときどんな気持ちだった。 B: _____時は本当にうれしかったなあ。	母	0	11	89
		学	0	52	48
	11.A: あなたのご主人は、どんな方でしたか。 B: _____人は、私のことをとても愛してくれていました。	母	0	0	100
		学	14	22	64
	12.A: 作家の川端康成さんにお会いになったことがあるそうですが、どんな方でしたか。 B: ええ、_____方は、とても物静かな方でした。	母	0	16	87
		学	10	32	58

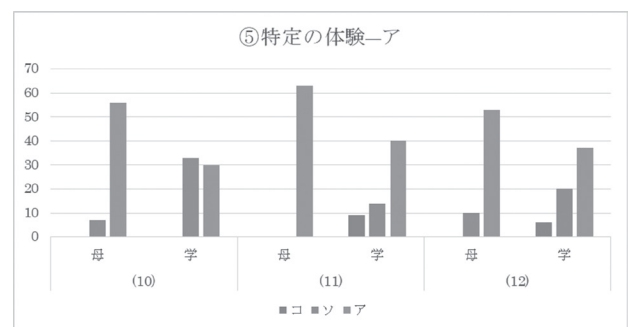


図5 「特定体験—「ア」」の選択状況

質問(10)、(11)、(12)は特定の体験についての会話文であり、「ア」系の指示詞を使用すべきである。

話し手は、質問(10)では「合格した知らせを見たとき」の気持ちを、質問(11)では「主人」の人柄を尋ねられている。それらの情報は、聞き手にとっては知らない物事である。聞き手の知らない物事や話し手と聞き手が体

験を共有していない出来事について述べる場合は、主に「ソ」系の指示詞を用いるが、特定の体験や聞き手が知らない物事であっても、話し手が体験した、或いは知っている物事でありさえすれば、「ア」系の指示詞が用いられる。その「気持ち」は話し手の「特定の体験」であり、「主人」のことについて話し手はよく知っているため、「ア」系の指示詞を用いる。

調査の結果からわかるように、母語話者は「ア」系の指示詞を多く用いる傾向が見られる。それに対して、質問(11)と質問(12)では、学習者は「ソ」系の指示詞と「ア」系の指示詞を使用することが母語話者よりも多かった。そして、質問(10)では「ア」系より「ソ」系の指示詞が多く選ばれた。その原因として、学習者は「ソ」より「ア」系の指示詞はより遠い対象を指すのだととらえ、「合格した知らせを見たときの気持ち」は発話者との関わりが近いため、「ソ」を多く用いることにつながったと考えられる。同じ理由で、質問(11)では「主人」が亡くなり、「現在」の発話者との関わりが遠くなっているため、「ア」を多く用いる。ここでは、学習者は指示詞を選択する際に発話者との関わり(時間的・心理的な遠/近)によって指示詞を選択しているのではないかと考える。つまり、学習者が指示詞を選択する際、中国語の指示詞の用法が影響しているのである。

### (3) まとめ

以上、非現場指示における「コ・ソ・ア」の使用について、日本語母語話者と日本語学習者の使用状況を考察した。文脈焦点(特定の主題)の「コ」の使用については、母語話者と学習者の間に差異は見られなかったが、他の質問ではいずれも差異が見られた。日本語学習者が指示詞を選択する際の問題点はいくつか見られた。まとめると以下のようになっている。

- ①共有体験・知識の「ア」を習得していない。
- ②体験・知識提示、仮定文脈の「ソ」を習得していない。
- ③母語の「这」系の指示詞の用法が「コ」系の指示詞の使用に影響している。
- ④「ソ」と「ア」は、発話者との関わり(時間的・心理的な遠/近)によって選択される。
- ⑤日本語の指示詞の現場指示用法が非現場指示用法に影響している。

以上の問題点から、日中指示詞における系列の違いの影響で非現場指示の「ソ」と「ア」の選択に誤用が起こること、指示詞を選択する際に母語の影響を受けているのではないかと考えられる。

学習者が誤用を犯す原因は次のように考えられる。

まず、日中指示詞の系列の違いが影響をもたらしていると考えられる。すなわち、遠い要素(時間的、心理的に)を指すときに「ソ」と「ア」のどちらを使うのかということである。

そして、学習者が日本語の指示詞を選択する際に母語の指示詞の用法が影響しているのではないかとすることも考えられる。基礎調査では、日本語において通常「コ」系の指示詞を用いない項目に対し、学習者が「コ」系の指示詞を母語話者よりも多く選択する傾向が見られた。その原因として、中国語では指示詞が主に発話者との関わり(時間的、心理的な遠近)によって選択され、近称指示詞「这」系がよく用いられることが影響していると考えられる。

さらに、学習者が非現場指示の用法を習得していないことも誤用がおきる原因だと考えられる。日本語教育において初級、中級を通して指示詞の現場指示用法(文脈指示)は学習項目として扱われているが、指示詞の非現場指示用法(文脈指示)は学習項目としてほとんど取り上げられていないので、指導が不十分であると考えられる。

## 5. 今後の研究

これからの研究は、基礎調査で見出した問題点を中心にして展開していく予定である。

本調査は日本人母語話者と中国人日本語学習者(上級者:来日2年以上、N1に合格)を調査対象にする予定である。本調査で用いる非現場指示「コ・ソ・ア」についての日本語のテストは「文法性判断テスト」と「受容性テスト」の2種類を予定している。文法性判断テストは基礎調査で見出した問題点をもとに作成し、同時にその指示詞を選択した理由も調査する。そして、受容性テストでは、会話文の答えとなった指示詞の受容性を調査する。さらに、基礎調査では予想したとおり、「コ」系の指示詞は母語話者よりも学習者が多く使用しているという結果がみられたので、学習者に対して中国語の「这」と「那」の使用とその指示詞を使用する理由を調査し、母語の指示詞の用法が日本語の指示詞の選択に影響しているのかを検証する。

注1：指示詞は捉え方によって選択が違う場合があり、完全に「誤用」と言いにくいことが少なくない。本研究は会話における非現場指示の「コ・ソ・ア」の使用状況と「知識を共有できるか」(1978堀口)の観点からの指示詞の「誤用」を調査し、その会話における「コ・ソ・ア」の選択要因を考察する。

注2：仮定された未来の場合、「コ」系の指示詞は使われにくいだが、完全に用いられないわけではない。例えば、話し手が指示対象を特に取り上げたい、または聞き手の注意を引きたいときには「コ」系の指示詞を用いることができる。本研究では、仮定文脈の用法に注目して研究する。

### 参考文献

- ・ 庵功雄・三枝玲子 (2013) 『日本語文法演習まとめり 表現—指示詞、接続詞、のだ・わけだ・からだ—』スリーエーネットワーク
- ・ 金水敏 田窪行則 (1992) 『日本語研究資料集【第1期第7巻】指示詞』ひつじ書房
- ・ 金水敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版
- ・ 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 pp.185-190 大修館書店
- ・ 阪田雪子 (1971) 「指示詞「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21, pp.125-138 東京外国語大学
- ・ 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』増補版 くろしお出版
- ・ 張久 (2004) 現代漢語「这・那」的研究
- ・ 友松悦子・和栗雅子 (2004) 『短期集中初級日本語文法総まとめ ポイント20』スリーエーネットワーク
- ・ 野浪正隆・劉佳 (2010) 「『コ』と『ソ』の非現場指示用法に関する研究—アンケート調査に基づいた使用現場からの一研究—」『大阪教育大学紀要』第I部門 第59巻 第1号 pp.55-76
- ・ 堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 pp.23-44 大阪外国語大学
- ・ 呂叔湘 (1995) (編集)・牛島徳次 菱沼透 (翻訳) 『現代漢語八百詞』増訂版 商務印書館



# Factors affecting the choices of Japanese demonstrative pronouns “ko, so, a” in conversations by Chinese learners of Japanese

ZHAO TIAN NING

The following misuse is often seen when Chinese learners of Japanese choose the Japanese demonstratives “こ, そ, あ”.

A: おとし、いっしょに箱根へ行ったでしょう。それは6月でしたよね。  
 (“あれ” is the correct choice here.)

B: いいえ、8月ですよ。

There are two main reasons for the misuses like the above. One is caused by differences between Japanese and Chinese demonstratives and the other one is caused by lack of teaching on non-deictic demonstratives in Japanese. This paper examines whether the learners’ mother tongue interferes with their Japanese when they learn Japanese non-deictic demonstratives, how Chinese learners of Japanese learn Japanese non-deictic demonstratives and how they choose and use Japanese non-deictic demonstratives. Then, in order to find out the use tendency of the Japanese native speakers and the usages which the learners tend to misuse easily, this paper also examines the basic usage of “こ, そ and あ” in conversations for Japanese native speakers and Chinese students in Japan. Through this survey, the usage tendency of Japanese native speakers and some problems regarding choosing them by Chinese learners were found.